紅い眼の男

ウィリアムターナー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

穢土転生を解除した筈が見知らぬ場所で目を覚ました。紅き眼を持つ彼はそこで妖精たちと出会う。

目次

1 … 1
2 … 6

1

そこは地獄だった。宿敵【ルドラ・ファミリア】の罠を間一髪の所で回避し、奴等を追い詰めた。やっと闇派閥(イヴィルス)も、『悪』の時代も終わる。そう思った所にそれは現れた。

途轍もない無機的な高音域、紛れもなくダンジョンの『痛哭』と同時に現れたそれはこの世を地獄へと変える正しく『厄災』だった。

事態を把握する間もなく1つの少女の命が散った。そしてそれに反応する間に1つ、また1つと仲間の命が奪われた。

激昂し、『怪物』へ放った渾身の一撃も簡単に躱されその反撃によって命を散らそうとするリューを救ったのは輝夜だった。片腕を犠牲にして、ではあるが。

しかしそれでも【アストレア・ファミリア】は折れなかった。リャーナとセルティは仲間の仇に怒りの炎を燃やし、冒険者必殺の魔法をもって『怪物』に抗おうとした。が、それも破壊者(ジャガーノート)唯一の盾にはね返され、2人はあっけなく炎上した。

今度こそ絶望した。心が折れた。

白兵戦にすら持ち込めず、切り札である魔法さえもはね返される。この世の理不尽のような存在にリューは生まれて初めて『恐怖』した。

アマゾネスのマリューが八つ裂きにされ、みんなの姉のような存在であったマリューも頭から喰われた。それらの事実が『恐怖』を加速させ、リューの心に深い『傷』を作っていく。

『破壊者』が標的をジュラ率いる【ルドラ・ファミリア】に移している間に【アストレア・ファミリア】の団長であるアリーゼが状況を確認するも残されたメンバーは既に満身創痍だった。

アリーゼ自身もボロボロであり、輝夜は隻腕に、小人族(パルゥム)のライラにいたっては反射された『魔法』によって両眼を失っていた。そして生き残った3人はリューを生かすことを決めた。【ルドラ・ファミリア】を殲滅した【怪物】に向かって、明確な『死』に向かっていく仲間に涙が止まらなかった。

――――――待って。

――――――行かないで。
――――――お願い。
リューは震える声で、歌い出した。
「・・・・【今は遠き、森の空・・・・・】」
最初に標的になったのはライラ。視覚を失い動けない彼女を、破壊者（ジャガーノート）は『爪』で引き裂こうとした。が、止まった。
死ぬ前に爆弾を浴びせようと考えていたライラもいつまでも訪れない『死』に不思議に思う。確かにすぐそこに気配を感じる『怪物』はいつまで経っても襲ってはこなかった。
辺りは静寂している。いつのまにか妖精の歌も止んでいる。そして自分と破壊者（ジャガーノート）の間に1つの気配が生まれている事に気付いた。

リューは見てるしかなかった。
歌いながら仲間たちが犠牲になろうとするのを。
破壊者（ジャガーノート）がライラにその『爪』を振り下ろそうとして、止まった。
リューが思わず詠唱を止めてしまい、顔を上げると1人の青年がいた。煙の様にライラの前に出現してどういう方法かは分からないが破壊者（ジャガーノート）の動きを止めてみせた人物に希望を抱いた。
年の方は多分２０くらい。顔立ちは整っていて何より特徴的だったのが、リューたちの絶望を照らすような紅い眼。
そして青年が何かを口にしようとした所でまた絶望が動いた。先程まで確かに動きを止めていた筈の『怪物』が『爪』を振り下ろし、青年とライラの体を引き裂いた。
暗闇の中に現れた微かな希望すらも引き裂く『爪』に再び絶望に叩き落とされた気になったが、それはリューの勘違いだった。
引き裂かれた2人の体が烏に変化し飛んで行ったのだ。驚くリューの背後にいつの間にかライラを抱えた青年が移動していて、彼女をリューに預けたと思ったら『怪物』はこの世の全てを焼き尽くす様な黒炎に包まれ悲鳴を上げながら消滅したのだった。

目を覚ましたら何処か薄暗い場所にいた。
また穢土転生の術かとも思ったが自分の身体を見る限りどうやらそうではないらしい。身体は塵も纏っていないし、何より自分の意思で動く。
何故だかは分からないが、生前殆ど失っていた視力も回復している。それに病に蝕まれていた筈の身体も軽い。
どうにか現状を把握しようと周りを見渡してみたが、あまりにヒントとなる物がない。取り敢えず人を探すのが早いと思い歩こうとすると近くで悲鳴のような音が聴こえる。
急いでその声の方へ走ると狭い通路を抜けて広い空間が見えて来た。そこで目にした物は信じられない様な光景だった。
大きく抉れた壁面にいくつもの大窪地（クレーター）。至る所に破壊の爪痕が残っており、強烈な血の匂いと共に多くの無残な亡骸がそこには転がっていた。そこは自分の最も嫌う、この世から無くしたいと思っていた戦場である事を理解した。
そして今も戦闘が続いており、そこには今まで自分が見た事のない様な『怪物』とお伽話の中でしか存在し得ない妖精（エルフ）、そして『怪物』によって今にも命を散らしそうな少女を確認したイタチの行動は速かった。
すぐに少女と『怪物』の間に瞬神の術によって体を滑り込ませ己の万華鏡写輪眼による幻術『月詠』によってそれの動きを止める。
そして、呆然としてる少女たちに状況を尋ねようとしたところで予想外なことが起こる。自身の『月詠』を破れる存在など同じうちは一族の写輪眼使いくらいのものだが、その『怪物』はそれを破って、イタチと少女を抹殺しようとその『爪』を振り下ろしてきたのだ。
しかし、天才だらけのうちは一族の中でも飛び抜けた天才であるイタチの命をこれくらいで獲れるはずがなく、得意の烏分身と変わり身の術によって窮地を脱し、少女を抱えて即座に妖精（エルフ）の少女の近くまで移動する。

驚愕で硬直している彼女に腕の中の少女を預け『怪物』を処理しようと前に出る。骨の様な見た目のそれに得意の火遁はあまり効果がなさそうだと考え、身体に負担はかけるが万華鏡の瞳術である『月詠』を破る未知の生物を倒す為に、回避不可で対象を燃やし尽くすまで消えない黒炎、『天照』を使用した。
断末魔を上げる怪物を黒炎が燃やし尽くしたのを確認すると未だ状況を把握できていない少女たちに声をかけた。

私たちの仲間の命をいくつも奪った『絶望』の象徴ともいえるモンスターが突然現れた青年によってあっさり倒されるのを呆然と見ていたリューは青年に声をかけられた事で我に帰った。
この下層にソロで来れて先程圧倒的な強さを見せつけた青年に始めは闇派閥（イヴィルス）の仲間かもしれないと身構えたが、それならば私たちを助けたりはしないだろうと考え直し、素直に礼を言った。
私と同じく硬直が解けたアリーゼと輝夜も少し警戒しながらもお礼を言いに来た。それに答えた彼は

「この場所が何処なのか知ってる事が有れば教えてほしい。」

という質問をしてきた。
ふざけているのかと怒りを覚えたがどうやら彼は気が付けばこのダンジョンに倒れていたと言うのだ。そんな馬鹿な話があるかと思ったが、彼は『ダンジョン』も『オラリオ』という単語も聞いた事がないらしい。
変わりに『火の国』や『木の葉』、『チャクラ』について聞いた事があるかと聞かれたが私はないとだけ答えるとアリーゼや輝夜、ライラも同じらしく、聞いた事がないと答えると彼は難しそうな表情で考えこんだ。そして恐らく別の世界から自分はやってきたと話し出した。
アリーゼたちは半信半疑の様子だったが、私は彼の言うことが本当

の事だと思った。私には彼が嘘をついている様には見えなかったし、先程の戦闘、何より命の恩人である彼の事を疑いたくなかった。
それにオラリオにいたらあれ程の戦闘力を有する物が全くの無名なんてあり得ない。と思ったところで、そういえばまだ彼の名前を知らないと思って尋ねてみた。
彼の名前は「うちは・イタチ」というらしい。姓と名が反対なのは極東出身の者の特徴ではあるが、極東出身の輝夜も聞いたことがないそうだ。
少し心が平穏を取り戻しかけていたが、視界の奥の方で男が動いたことで忘れていた怒りが燃え上がってきた。あいつの、あいつらのせいで【アストレア・ファミリア】の仲間たちは私たちを残して全滅したんだ。共に正義を信じて戦ってきた仲間たちが。
しかも、何とか生き残った仲間も輝夜は片腕を、ライラは両眼を失っているし、アリーゼも重傷を負っていた。そもそも彼、イタチさんが来てくれなかったらアリーゼたちも私1人を残して間違いなく死んでいた。そう考えると足が勝手にジュラの方へと進んでいた。
アリーゼと輝夜もジュラの存在に気付き、私と同じ気持ちらしくジュラの方に足を向けている。ライラだけは目が見えてないのでエリクサーを顔にかけてイタチさんの側で休んでいる。
ジュラは近づいて来る私たちに気づいて悲鳴をあげたが、恐怖でろくに逃げれないようだった。私はジュラに止めをさそうと木刀を振り上げたが、それはイタチさんに腕を掴まれ止められた。
何故こんな奴を庇うんだと怒りが沸き上がったが、彼はあの紅い眼（「写輪眼」というらしい）の能力によってジュラに催眠をかけ、彼らのアジトやギルドの裏切り者の情報をジュラに自白させた。
それでも怒りが収まらなかった私たちはジュラを始末して、残党に復讐を誓ってイタチさんと一緒にダンジョンから脱出した。復讐を誓った私たちをみたイタチさんの紅い眼はどこか哀しそうだったことからは目を背けて……

2

「私は、、アストレア様のもとには帰れない」
そう、リューが言い出したのはダンジョンから脱出してすぐのことだった。
「リオン・・・？貴方、急にどうしたの？」
「そうだぞ、リオン。苦しいけど、みんなの事はちゃんとアストレア様に報告しなきゃいけないだろ？」
アリーゼとライラがそうリューを諭そうとするが、リューは止まらない。
「私は、、あいつらが憎い‼？憎くて憎くてどうしようもない！みんなを殺した奴らを、関わってる者全てに復讐するまでは治まりそうにない！」
それは悲痛な叫びだった。
「今の私に正義は、ない・・・・」
「だから今の姿をアストレア様に見られたくない・・・」と呟く少女の姿は弱々しかった。
イタチは幼少時に戦争というものを見た。仲間が殺されたから殺す。そして相手も仲間ぎ殺されたから殺し返す。そうやって憎しみの連鎖が始まる。
一族もそうだった。虐げられている現状に恨み、憎み、大きな力へと変わっていき誰にも止められなくなる。『平和』を夢見た自分の理想とどんどんかけ離れていき、一族皆殺しへと走った。そして、最愛の弟へ自身への復讐を強いることで、最悪の犯罪者を討ち取った英雄にする事で憎しみに終止符を打とうとした。
愛情があるから憎しみが生まれる。憎しみの先には何もない。例え復讐を成功させたとしても得るものは何もない。生き方全てが狂わされてしまう。弟がそうだったように自身を見失い更なる闇に沈んでしまう。正しい道を進んでいくことを願っていたのに。
「リオン、やはり貴様は青二才だ」
イタチが思考にふけっていると今まで黙っていた輝夜がそう口に

する。
「仲間が死んだのは、あいつらが弱かったからだ。仲間を失ったのは、私たちが弱かったからだ。誰かのせいにするなら、それは私たちのせいだ。ジュラこそ生かしておいてはならないと思い殺したが、それ以外の者たちは牢にでも入れておけばいい」
「訂正しろ、輝夜!」
　輝夜の言い分にリューは激昂する。
「みんなが死んだのはジュラたちが卑怯な手を使ったからだ。みんなは弱くない。それにあんな『怪物』が出てこなければ誰一人死ぬ事はなかった。貴方のそれは、侮辱だ」
「確かに、奴らが卑怯な手を使わなければ、あんな『怪物』が出てこなければ誰も死ななかったのだろうな」
「ならば・・・・・!」
「だが、みんな死の覚悟を持ってあの場所に立っていた。この時代に闇派閥(イヴィルス)を相手にするという事はそういう事だ。なにより、私たちは冒険者だ。命以上に大切なことを求めてダンジョンに挑んでいる。貴様こそ仲間たちの正義を侮辱している」
　輝夜は反論しようとするリューの出鼻をおり、鋭い眼で、冷然とした口調で言い放った。
「私たち程度の実力で、全てを救えると思うな」
　リューの顔が苦しそうに歪む。
「いつか言っただろう、リオン?貴様の語る正義など都合のいい理想に過ぎないと」
「リオン、輝夜は言い過ぎだけど間違ってはいないわ。復讐がしたいのならしてもいい。でも、貴方の正義はこれくらいで無くなったりしない」
「っ・・・・・!少し頭を冷やしてきます・・・」
　輝夜だけでなくアリーゼにまでそう言われてリューは街へと消えていった。
「お前は何も言わなくていいのか?」
「アタシは以前にもぜーんぶ話半分で聞いとけばいいと言ってある。

どんな答えを出すかはリオン次第さ」
　黙っていたライラに声を掛けたらそう答えが返ってきた。
「ごめんなさいね。色々巻き込んじゃって。改めてお礼を言わせて。助けてくれてありがとう。私たちの本拠(ホーム)に招待してもいいかな？」
　アリーゼが改めてお礼といっしょにそんな事を言ってきたので他に行くあてもなかった俺は【アストレア・ファミリア】の本拠(ホーム)であるという『星屑の庭』に赴くことになった。

「そんな事があったのね・・・」
　目の前でアリーゼたちの報告を聞いてるのが彼女たちの主神であるアストレア様だそうだ。
　イタチからすれば神がいるなど到底信じられない話だが、成る程、確かに普通の人間ではない圧を感じる。ここオラリオでは神がたくさん天界というところから降りてきていて、人間たちとファミリアというものをつくるらしい。神が主神(親)で人間が眷属(子供)というそうだ。
　忍びの世界で言うのならば神は大名で団長は影、ファミリアは里なのだろう。人も目的もそれぞれで異なって運営されているのだろう。
「あなた、イタチ君だったかしら？まずはあの子たちを助けてくれてありがとう。それで、あなたには何の利もないことだけど、少しお願いしてもいいかな？」
　イタチがこの世界について思考を巡らせてると目の前の女神はそう切り出してきた。
「リューの側にいてあげて欲しいの」
　予想外のことを言ってきたので訝しんでいると
「本当は私が行くべきなのでしょうけど、これだけ同時に子供たちが死んだのは初めてで・今はちょっと私自身も受け止めきれてないから・・・」
　その様子から言いたい事が分かったのかそう続けてくる。
「アリーゼたちはどうしたんです？」
　言外にそれは自分の役割ではないと示したが、

「アリーゼたちはあの子たちの遺体を回収しにダンジョンに向かったわ」
　あれ程の重傷からもう動けるとはと、この世界の医療に感心していると「それに、」
「リューとあなたはどこか似ている気がするから」
　と続けられた。どう断ろうかと考えて
「俺は犯罪者だ。自身の器を図るために同胞を皆殺しにした。今回貴女の子供たちを助けたのは俺の気まぐれだ。思想はどちらかというと闇派閥（イヴィルス）とやらに近い」
「嘘ね・・・」
　一瞬で見抜かれた。正確には全てが嘘という訳ではないのだが。
「なぜ嘘だと分かる？」
　嘘だと断定してくるのを不思議に思い訊ねると「神に嘘は通じないのよ」と返ってきた。
「神である私を騙そうとしたのをチャラにしてあげるからリューをお願いね」
　無茶苦茶な話だ。そもそも助けた恩があるのならそれとチャラだとも思ったが、そのお願いくらいなら聞いてもいいかと何故だか思った。嘘をつけないことにどこか安心したのかもしれない。生粋の嘘つきである、俺がだ。
「分かった。だが、どうなるかは分からないぞ」
　そう忠告だけして俺はリューを探しに街へ向かった。

　満月の明かりも届かない暗い路地裏の闇の中にリューはいた。
「イタチさん、ですか・・・？」
　その質問に「そうだ」とだけ返して口にする。
「復讐など止めておけ」

「っ・・・・・！　貴方に・・・　貴方に、私の何が分かるというのですか・・・？助けて頂いたのは感謝しています。しかし、貴方に私のことをどうこう言われる筋合いは無い！」
　それは強い拒絶の言葉だった。しかし、
「復讐はお前に何も生まない。復讐によって生まれるのは新たな憎しみだけだ。それが連鎖して新たな復讐を呼ぶ。そこにお前の求めるものはない」
　言わなくてはならない。そこに待っているのは争いだけだと。
「そんな事は言われなくても分かっている・・・！頭では分かっているのに心がそれを許さない‼？こんな事では、正義なき私では、アストレア様にもみんなにも向ける顔がない」
　苦しいのだろう。自分ではどうしようもないのだろう。だから、少し後押しをしてやる。
「別に憎むなと言っている訳ではない。お前は今、自分の理想の正義と現実との間で揺れ動いている。だが、何でも1人で背負い込む必要はない。そのために仲間がいるんだ。仲間を忘れるな」
「それに、神なんてものは恐らくそんなに多くのことを求めてはいない。お前の中で何かゆるぎないものを1つ見つければいい」
「ゆるぎないものを1つ・・・・・？」
　そう呟いたリューに「そうだ」と告げる。
「それさえあれば人は生きていける」
「貴方にはそれがありますか・・・？」
　その問いに言葉が詰まる。昔はあった。サスケという何よりも大切なものが。今はどうだろうか？俺にはもうないのかもしれない。
「昔は確かにあった。今はどうか分からないが・・・」
「そうですか・・・」
「でも、少し心が晴れた気がします」
　そう答えるリューの瞳には少しだが、確かに力が戻っていた。これならばもう大丈夫だろう。そう思い俺はリューの側から姿を消す。
「ありがとうございました」
　移動する俺の耳には確かにその言葉が届いていた。俺がここまで

力を貸すなんて妙な気分だ。もしかしたら『悪』を取り締まるという彼女たちの在り方にかつてのうちは刑務部隊を重ねたのかもしれない。

月を見上げながら俺はそう思った。